

---

# ハヤテのごとく

天河夏文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく

### 【Nコード】

N0872I

### 【作者名】

天河夏文

### 【あらすじ】

原作「ハヤテのごとく」の咲夜の誕生日パーティーの話にオリジナルストーリーを加えた笑いあり涙あり？の爆笑ストーリーです。

## 第1話（前書き）

最後まで読んでいただくと幸いです。

## 第1話

「あはようございます、お嬢様」

と、牧田と国枝はいつものように咲夜に挨拶してくるのであった

「今日はなんの日か覚えとるか？」

なんかほかに言うことあるんじゃないか？」

「はい？ 何でしょうか？」

「今日はウチの誕生日やないか！！ 何年ウチの執事やってるんや  
！」

「申し訳ございません、咲夜お嬢様」

「謝るんはええから。あつ、なんちゅうかウチがほしいのは心のこもった「笑い」や」

牧田と国枝は少し相談してから、

「「お嬢様、行きますよ」「」

「「ジャガイモがポテツと落ちた!!」「」

「どうでしょうかお嬢様?」

バンツ!!

「「!!!!」「」

「いったいいきなり何をなさるんですか?」

咲夜は突然どこからかハリセンを取り出して

強烈な突っ込みを入れていた

「あんなもんでウチを笑わせようなんて100万年はやいわ!」

「おはようございます、咲夜さん」

「今日はお誕生日おめでとございます」

と、なにも知らないメイド姿の千桜がやってきた

「おはよう、ハルさん」

「で、ハルさんはウチにいったいどんな「笑い」をプレゼントしてくれるのかな？」

「えっ・・・ まあ後で・・・（汗）」

いきなりの振りに千桜はその場を濁す

「そうかぁ・・・ あっ、そうや今日ウチの友達がくるんや」

「えっ、どなたですか？」

「ウチの中学の友達や」

「そうですか」

千桜は咲夜の友達がどんな人なのか少し気になるのだった

## 第2話

オリキャラ紹介

氷野涼音<sup>ひょののすずね</sup>です

彼女は、後から紹介する氷野清音の姉です

咲夜と同じ中学のクラスメイトで友達です

氷野の親は共働きの公務員です

髪の色は水色で目の色は黒っぽい紫色です

髪型はおろして肩くらいの長さです

次は涼音の妹の氷野清音<sup>ひょののきよね</sup>です

彼女は、咲夜と同じ学校の1年生です

髪の色は水色で目の色は薄紫です

髪型は短めのツインテールです

チツ チツ チツ チツ

目覚ましの針が7時を指した

ジリリリリッ ジリリリリッ カチャ

「う~~~~ん」

今日は日曜日

いつもより長く寝ていても誰にも文句を言われないのだが今日はそう  
ういうわけにはいかない

今日は友達の誕生日パーティーがあるのだ

そして、みんなで朝からその友達の家に行こうと約束していたのだ

誕生日パーティーといってもただの誕生日パーティーではない

愛沢家長女の咲夜の誕生日パーティーなのだ

<咲夜の誕生日パーティーなんだからすごく豪華なんだろうな>

そんなことを思いながら一階に行ってみると案の定誰もいない

父も母も大抵日曜日は休みなのだが大体昼近くまで寝ているし

ほかの日は朝早く出て行くにで中学に入ってから朝ごはんを作るもは涼音の仕事になっていた

今朝はトーストにベーコンエッグとかなり簡単なものにした

「日曜くらいは別にこんなでもいいわよね」

と独り言を言って二人分の朝食を机に並べていたら清音が下りてきた  
そして、かなり眠そうに

「お姉ちゃんおはよ〜」

「おはよ〜清音。ってちょっと起きるの遅くない？」

少し怒ったように言うと

「え〜だって今日日曜日だよ〜。今日は早く起きてるほづじゃん」

「なに言ってるのよ。今日は咲夜の誕生日パーティーだから朝から咲夜の家に行くって言ってたじゃない」

あきれたように言つと

「・・・。え〜〜、咲夜ちゃんの誕生日パーティーって今日だったのー!」

「ヤバイ、早く準備しなきゃ」

そう言つて部屋に戻ろうとする清音を呼び止めて

「その前に朝ごはんたべよう」

そついつて二人は仲良く「いただきます」と声を合わせ朝食を食べ始めた

朝食を食べ終わると二人は咲夜のパーティーの準備を始めた

身支度をした後クローゼットからドレスを出した

ドレスといつても簡単な装飾のついた安いものだ

昔親戚の人の結婚式に着ていったものだ

<咲夜が貸してくれるって言ってたけどいちよう持っていこ>

そして、誕生日プレゼントとドレスをかばんにつめてから清音の様子を見に行く

すると珍しく清音は準備を終わらせていた

「清音、準備終わってたんだ」

「うん。さっき終わった」

と、にこやかに応える

「けど、なんか荷物少ない？」

「だって荷物はプレゼントくらいしかないでしょ？」

「えっ、ドレスは？」

「ドレスは咲夜ちゃんが貸してくれるって言ってたから」

「ん。まあいいわ、そろそろ行きましょ」

机に咲夜の誕生日パーティーに行つてきます。と書置きを残して

二人は「行つてきまーす」と言い咲夜の家に向かった

＜私は結構しつかりしている方だと思う。けどなんで清音はなん  
であんなめんどくさがりなんだろ。根はいい子なのに＞

しばらく歩くと咲夜の家（まあ、豪邸のレベル）の前に着いたとき

入り口の前に今日来る別の友達が中に入ろうとしていた

すると清音が

「あれ琥珀ちゃんじゃない？」

「そうだ。琥珀――！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0872i/>

---

ハヤテのごとく

2010年10月9日22時51分発行